

資料 3

アンケート取りまとめ結果

資料3 アンケート取りまとめ結果

(1) アンケート調査の概要

(調査の主旨)

このアンケートは、海岸工学委員会・企画構想WGが実施するものです。企画構想WGは、本年から中長期的な海岸工学委員会活動に関して、種々の構想企画を行うタスクグループとして設置されました。

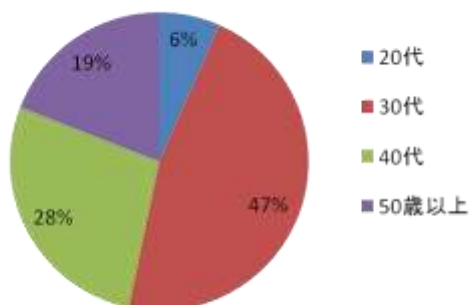
本アンケートは、海岸工学講演会・論文集をより活発に運営するために、今後どのように運営すべきかについて方針を考えるための資料として行うものです。海岸工学委員会としては、委員会の重要行事である海岸工学講演会・論文集が、様々な分野の発表の場としての統合的なプラットフォーム機能を獲得し、維持していくことが非常に重要と考えています。本アンケートで得られた皆様のご意向を集約し、年度内に海岸工学講演会・論文集の今後の改革に向けて構想する予定です。お忙しいと思いますが、海岸工学の持続的発展の為に、アンケート記入へのご協力をお願いします。

アンケート項目	36個
回答数	152名
調査期間	2010.6.28～2010.8.1
調査方法	HP < http://www.efeel.to/survey/cec-kikaku/ >

(2) 全データによる集計結果

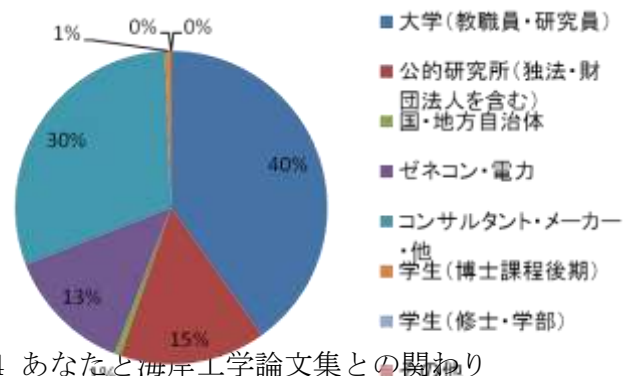
1. はじめに

1.1 年齢を教えてください。



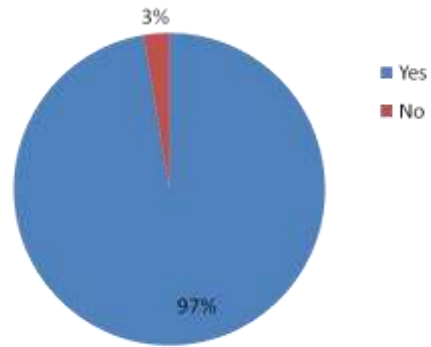
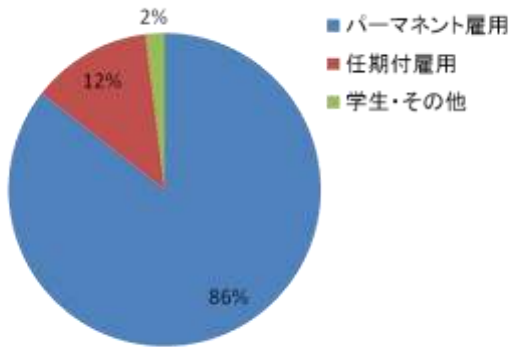
1.3 雇用形態を教えてください。

1.2 あなたの所属を教えてください。

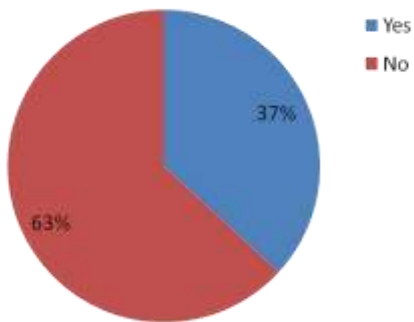


1.4 あなたと海岸工学論文集との関わり

を聞かせて下さい。 - 著者である

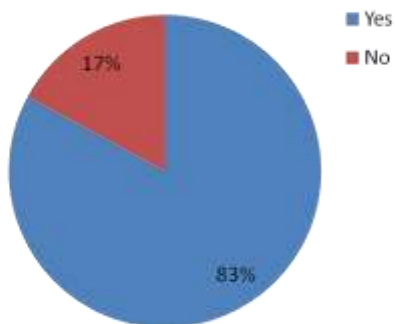


1.4 あなたと海岸工学論文集との関わりを聞かせて下さい。 - 査読者である

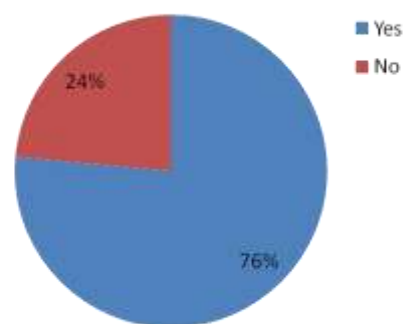


2. 現在の海岸工学論文集についてご意見を聞かせて下さい。

2.1 昨年から「土木学会論文集 B2」となったことを知っていますか？



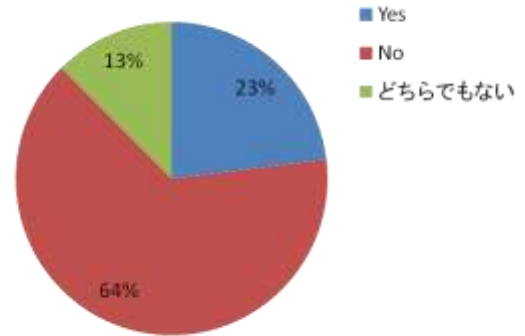
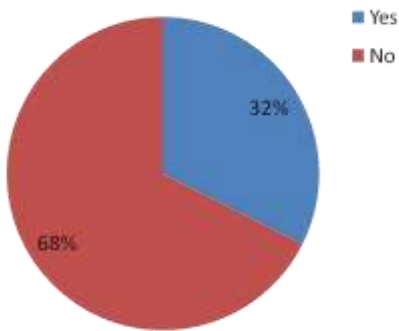
2.2 現在の出版形態・査読方法に満足している。



2.3 5ページは短いと思う。

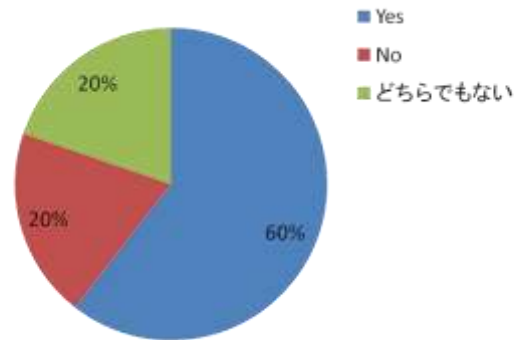
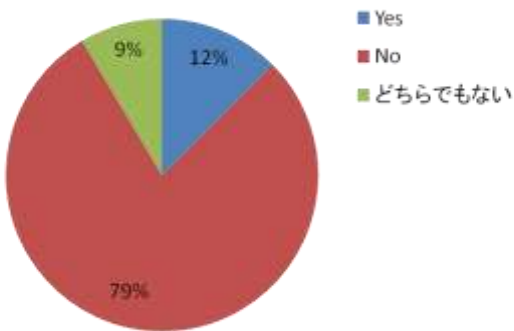
2.4 最初からフルペーパー査読をしたほ

うがよいと思う。



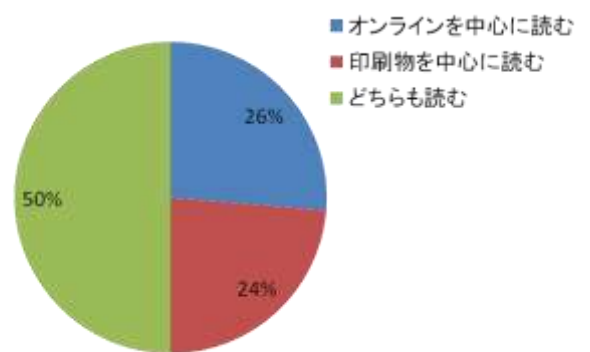
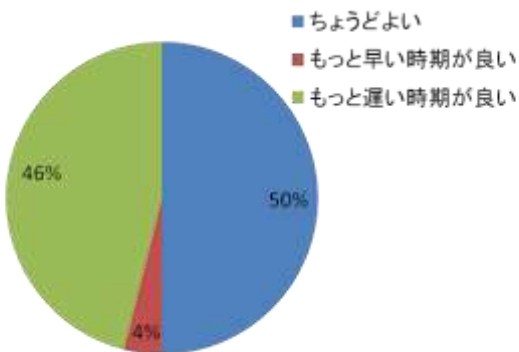
2.5 発表はなしで論文だけ投稿したい。

2.6 投稿者として査読プロセスには満足している。



2.7 投稿時期についてはどう思いますか？

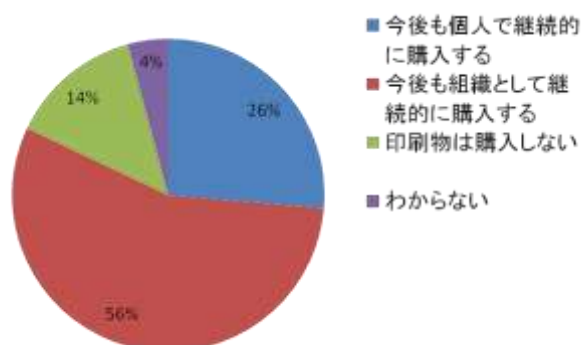
2.8 論文集がオンライン化しましたが、印刷物と比べてどう思いますか？



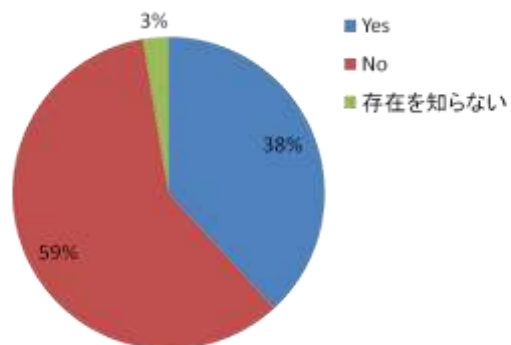
2.9 今後も現行の価格（5 千円）が維持さ

2.10 現在の討議集についてご意見を聞か

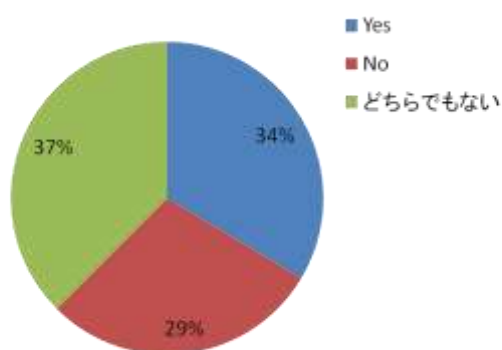
れるとすれば、印刷された論文集をこれ
からも購入されますか（複数回答可）？



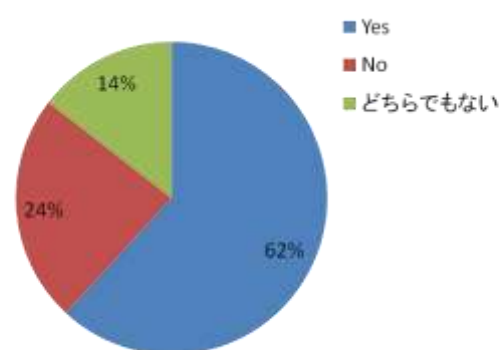
せて下さい。 討議集を利用しています
か？



2.11 現在の討議集の形態で満足している。
せて下さい。 討議集を利用しています
か？



2.12 討議受付は web 受付のみでも構わ
ない。

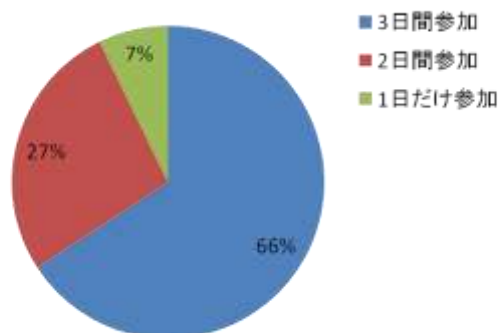


2.13 その他、改善点などがありましたら
ご記入下さい。

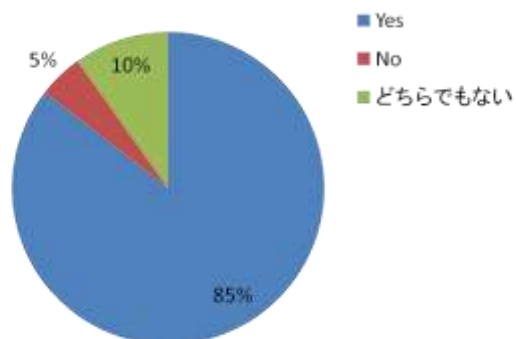
末尾にまとめて掲載

3. 現在の海岸工学講演会についてご意見を聞かせて下さい。

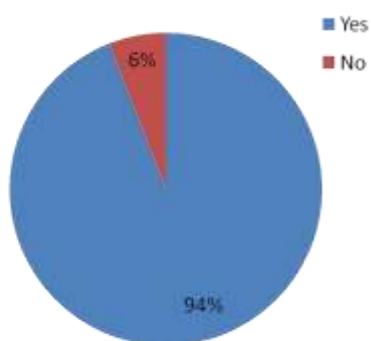
3.1 講演会への参加日数（前日シンポジウム，見学会は除く）は平均何日ですか？



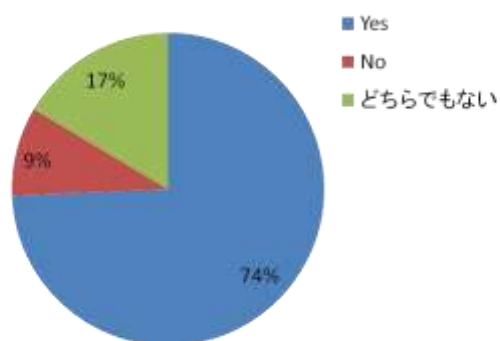
3.2 現在の形態で満足している。



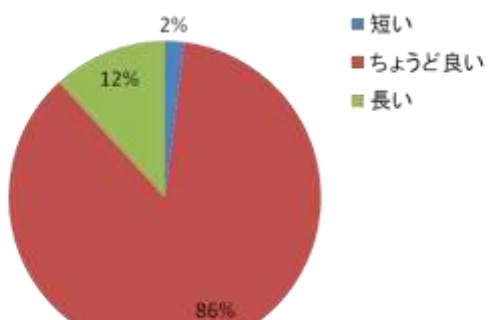
3.3 発表の経験はありますか？



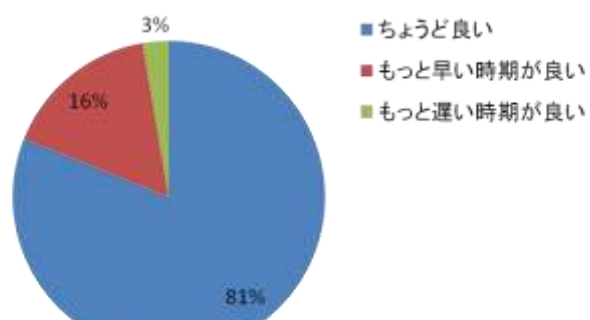
3.4 発表者として質疑の時間の長さ・質に満足していますか？



3.5 3日間の開催はどう思いますか？

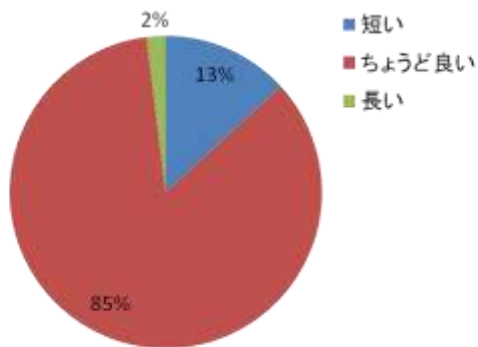


3.6 開催時期（現在は11月）についてはどう思いますか？

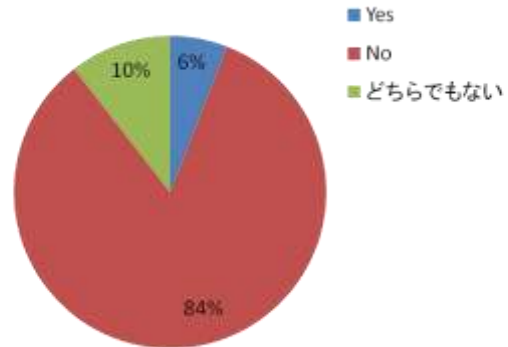


3.7 発表時間はどう思いますか？

3.8 可能ならば論文なしで発表だけした

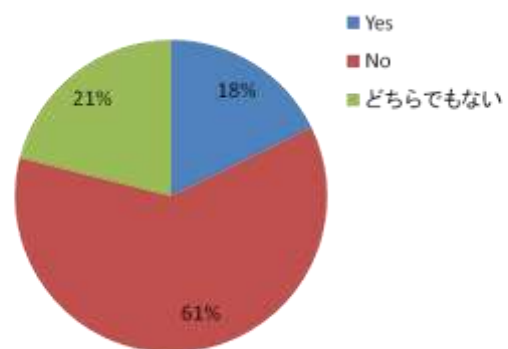
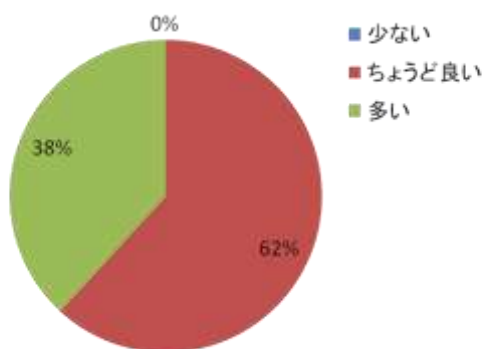


い。



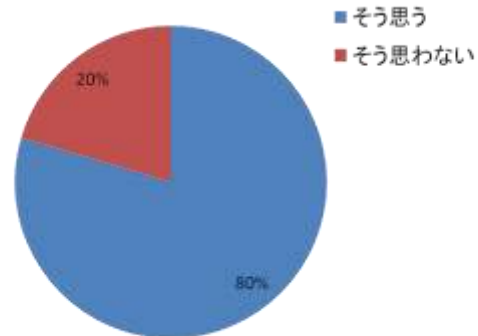
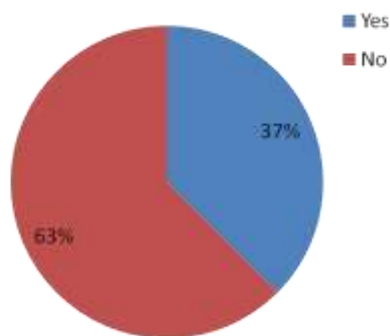
3.9 並行 5 会場についてはどう思いますか？

3.10 発表編数を減らしても休憩時間などを長めにしたほうが良いと思いますか？



3.11 過去 5 年間に見学会に参加したことはありますか？

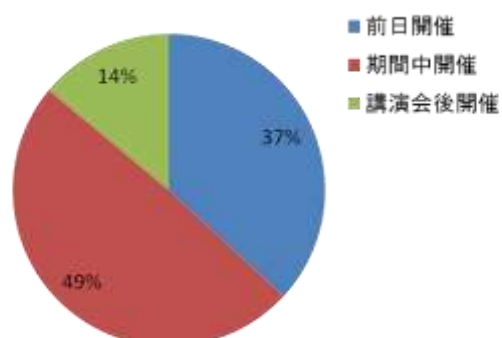
3.12 見学会は今後も継続すべきだと思いますか？



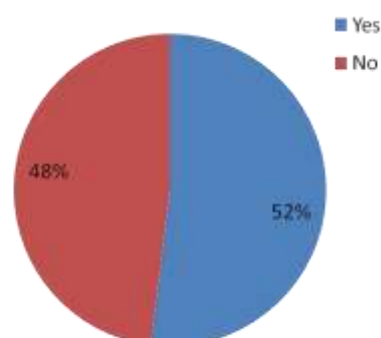
3.13 3.12 で「そう思う」と回答された

3.14 過去 5 年間に前日シンポに参加した

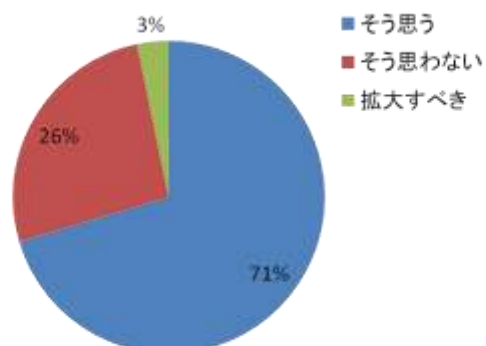
方に質問です。見学会はいつ開催すべきと思いますか？



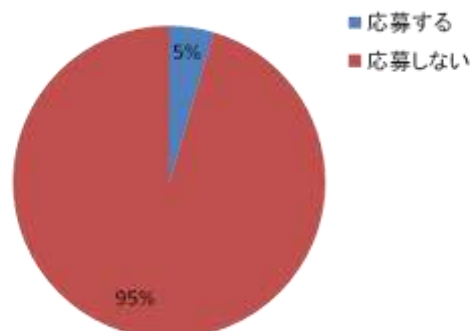
ことはありますか？



3.15 前日シンポは今後も継続すべきと思いますか？



3.16 講演会プログラムとは別に、公募型の自主企画セッションが設置された場合、あなたはセッションオーガナイザに応募されますか？



3.17 3.16で「応募する」と回答された方に質問です。自主企画セッションのテーマをお教え下さい。

末尾にまとめて掲載

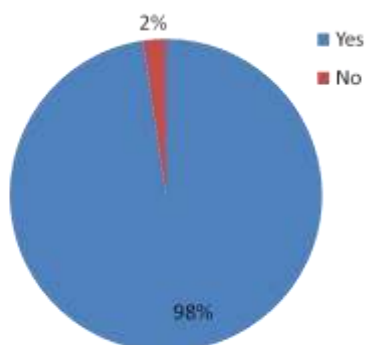
3.18 その他、改善点や投稿数を増やすアイデアがありましたらご記入下さい。

末尾にまとめて掲載

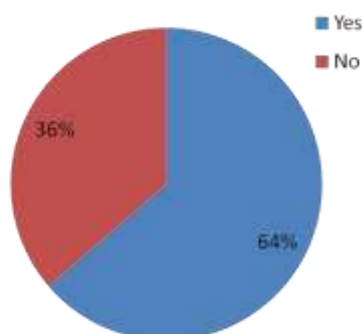
(3) 所属機関別の集計結果（差の見られる項目のみ抜粋）

2.1 昨年から「土木学会論文集 B2」となったことを知っていますか？

・大学・公的研究所

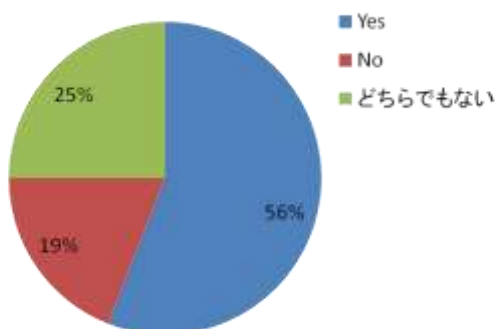


・ゼネコン・コンサル

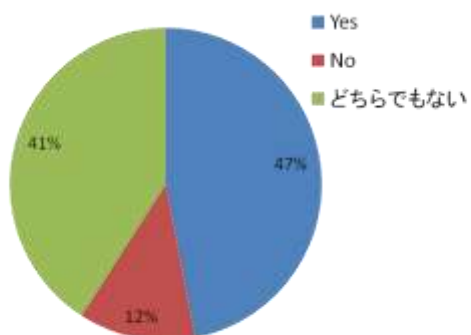


2.2 現在の出版形態・査読方法に満足している。

・大学・公的研究所

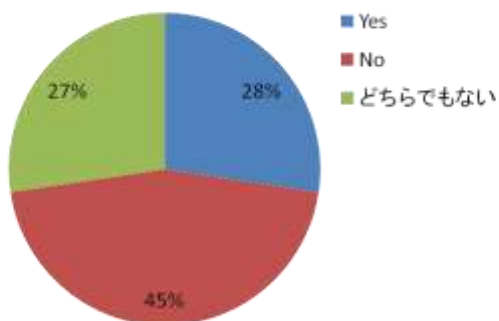


・ゼネコン・コンサル

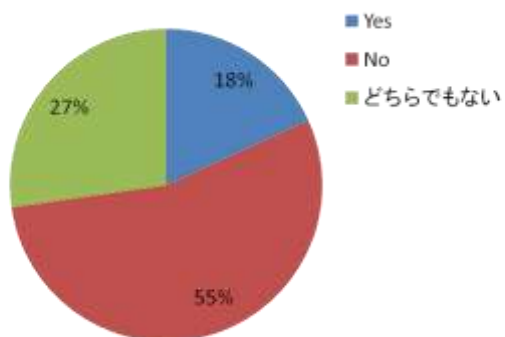


2.3 5ページは短いと思う。

・大学・公的研究所

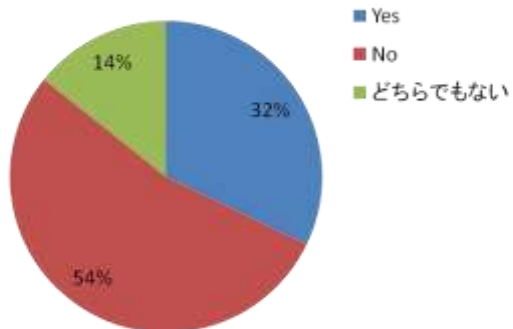


・ゼネコン・コンサル

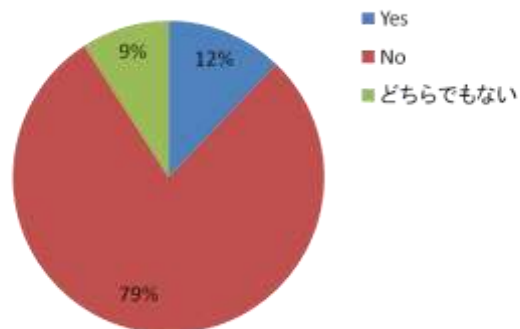


2.4 最初からフルペーパー査読をしたほうがよいと思う。

・大学・公的研究所

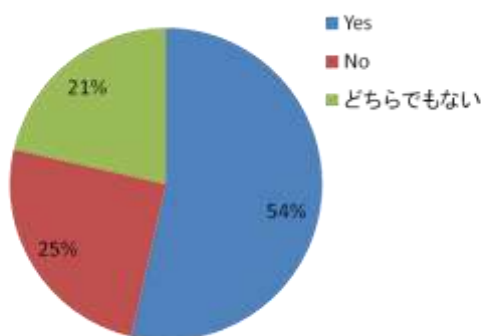


・ゼネコン・コンサル

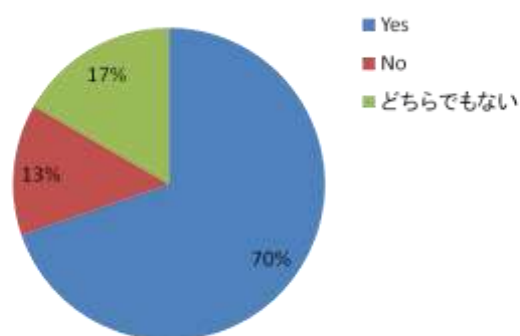


2.6 投稿者として査読プロセスには満足している。

・大学・公的研究所

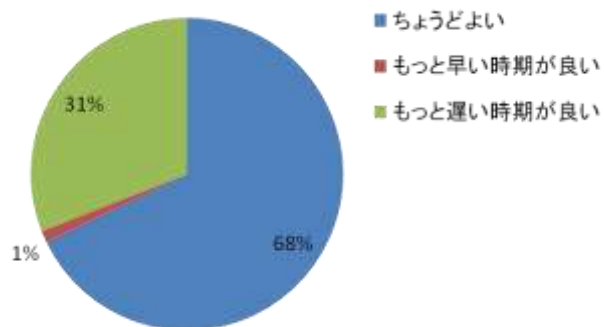


・ゼネコン・コンサル

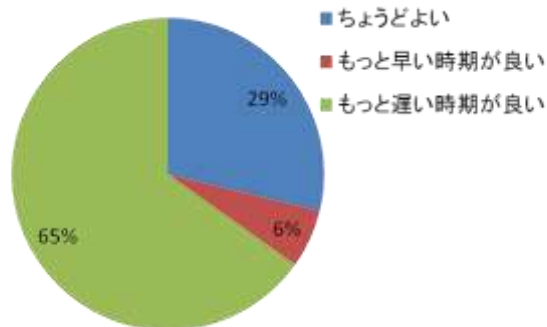


2.7 投稿時期についてはどう思いますか？

・大学・公的研究所



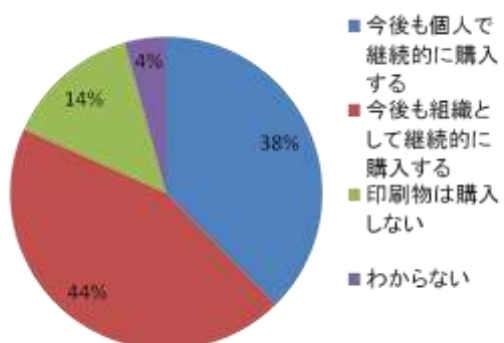
・ゼネコン・コンサル



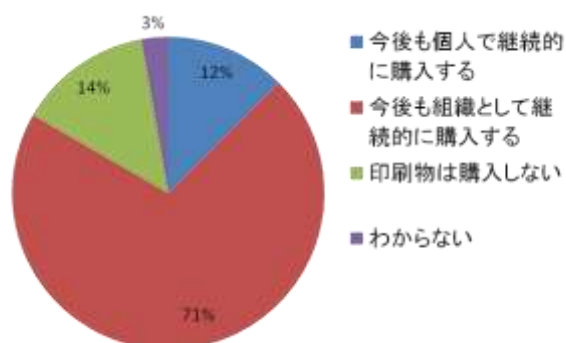
2.9 今後も現行の価格（5千円）が維持されるとすれば、印刷された論文集をこれからも

購入されますか（複数回答可）？

・大学・公的研究所



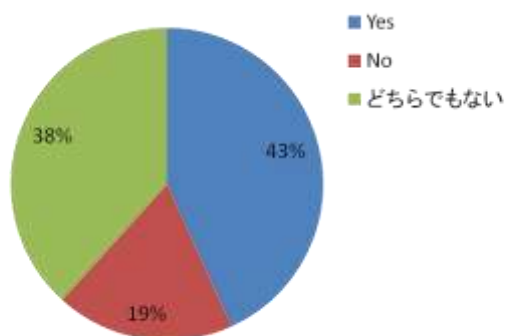
・ゼネコン・コンサル



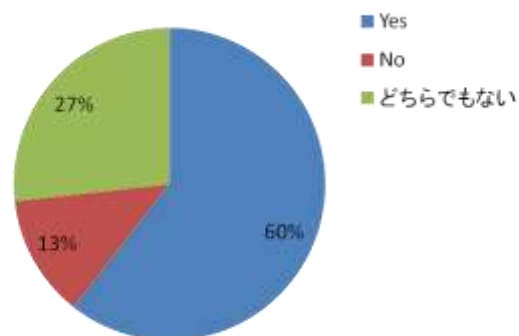
(4) 年齢別の集計結果（差の見られる項目のみ抜粋）

2.2 現在の出版形態・査読方法に満足している。

・20歳代・30歳代

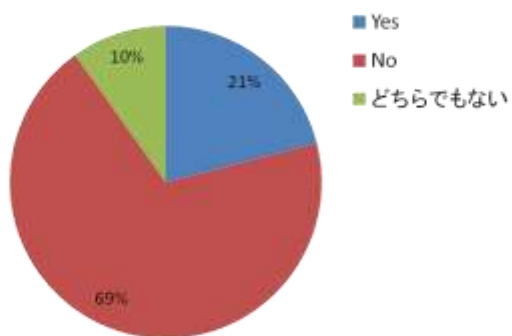


・40歳代・50歳以上

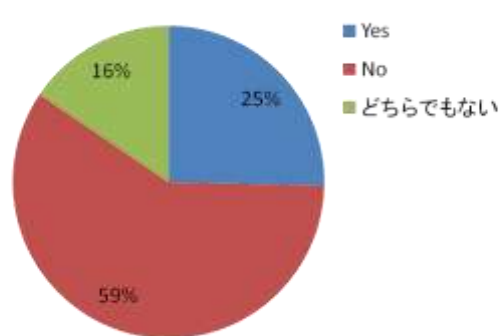


2.4 最初からフルペーパー査読をしたほうがよいと思う。

・20歳代・30歳代

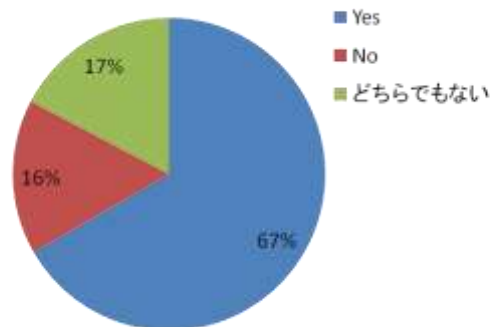


・40歳代・50歳以上

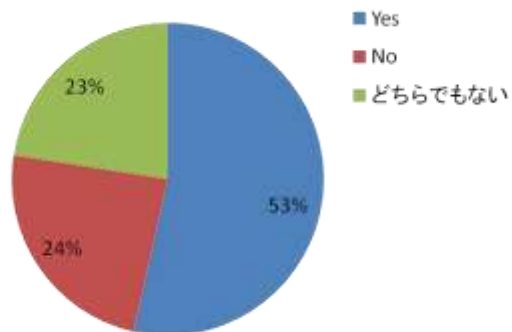


2.6 投稿者として査読プロセスには満足している。

・ 20 歳代・ 30 歳代

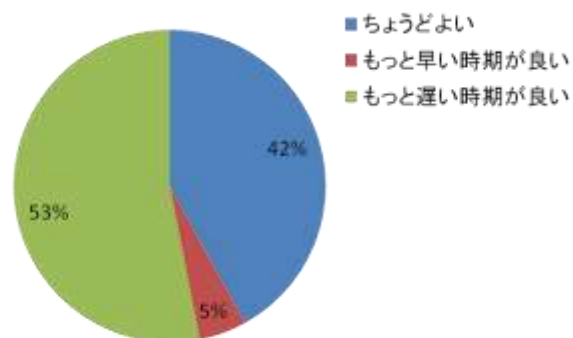


・ 40 歳代・ 50 歳以上

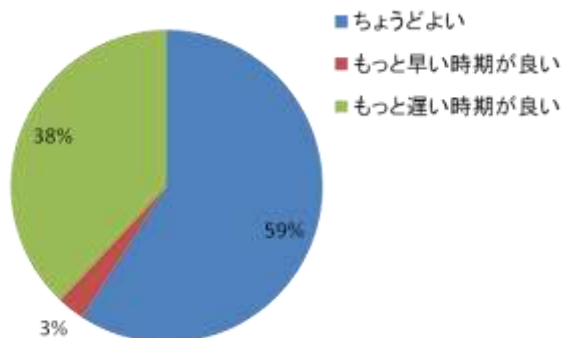


2.7 投稿時期についてはどう思いますか？

・ 20 歳代・ 30 歳代

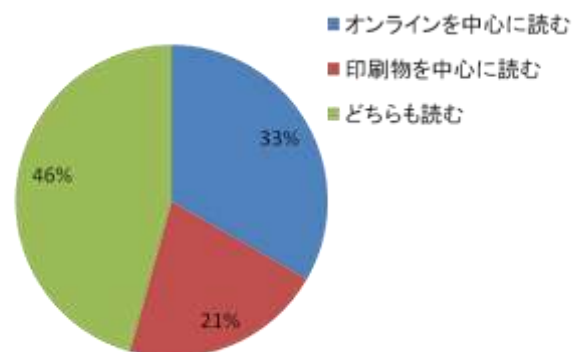


・ 40 歳代・ 50 歳以上

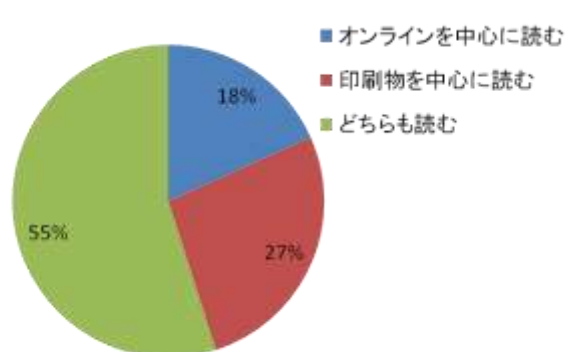


2.8 論文集がオンライン化しましたが、印刷物と比べてどう思いますか？

・ 20 歳代・ 30 歳代

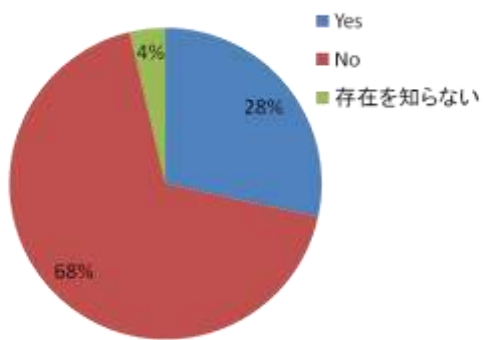


・ 40 歳代・ 50 歳以上

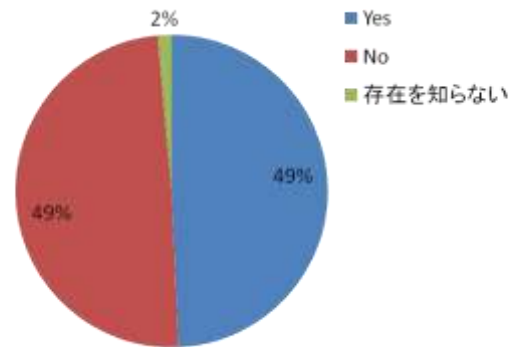


2.10 現在の討議集についてご意見を聞かせて下さい。 討議集を利用していますか？

・ 20 歳代・ 30 歳代

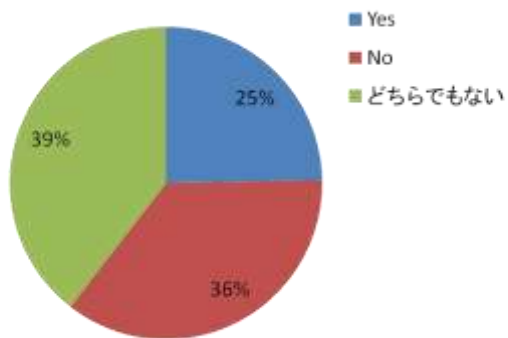


・ 40 歳代・ 50 歳以上

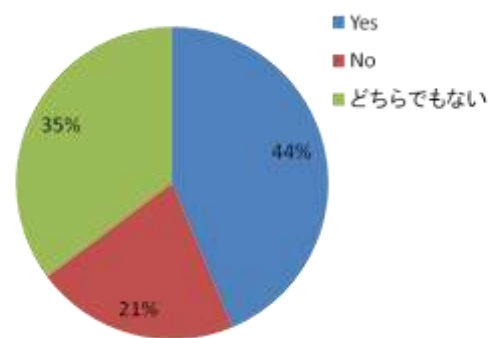


2.11 現在の討議集の形態で満足している。

・ 20 歳代・ 30 歳代

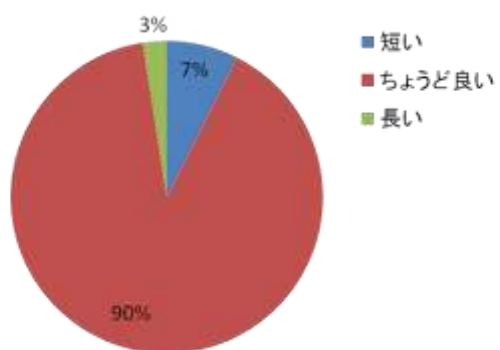


・ 40 歳代・ 50 歳以上

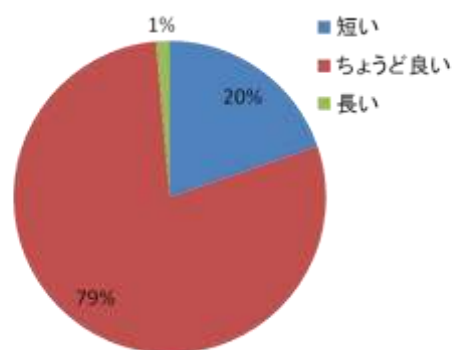


3.7 発表時間はどう思いますか？

・ 20 歳代・ 30 歳代

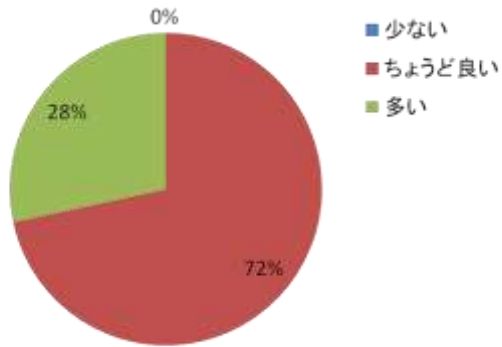


・ 40 歳代・ 50 歳以上

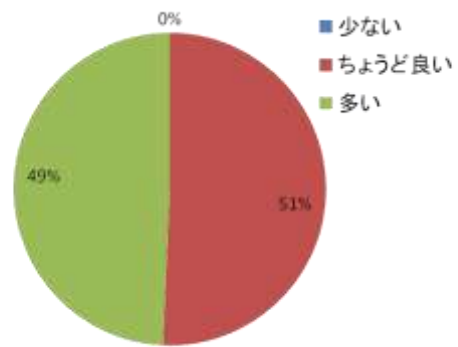


3.9 並行 5 会場についてはどう思いますか？

・ 20 歳代・ 30 歳代

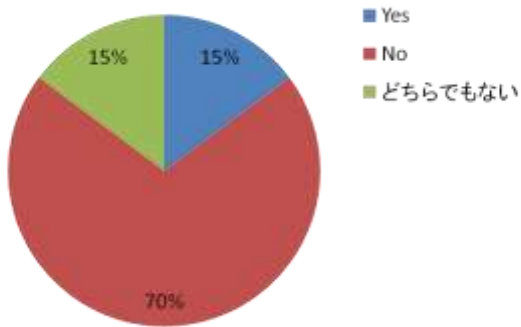


・ 40 歳代・ 50 歳以上

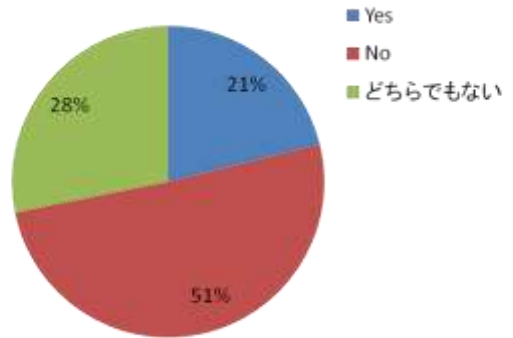


3.10 発表編数を減らしても休憩時間などを長めにしたほうが良いと思いますか？

・ 20 歳代・ 30 歳代

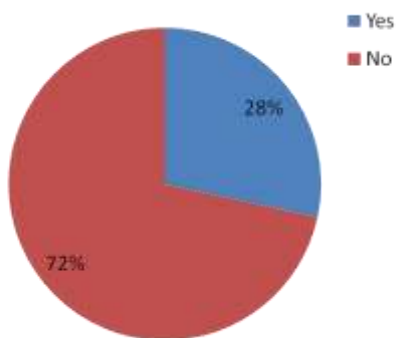


・ 40 歳代・ 50 歳以上

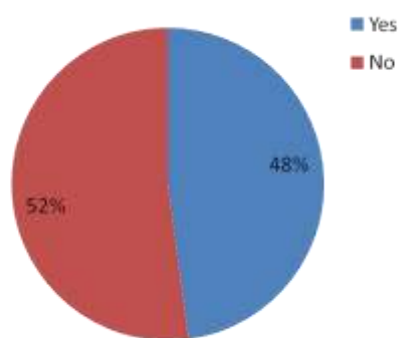


3.11 過去 5 年間に見学会に参加したことはありますか？

・ 20 歳代・ 30 歳代

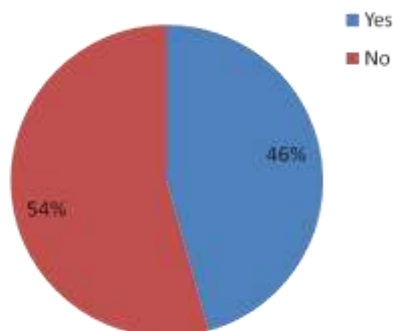


・ 40 歳代・ 50 歳以上

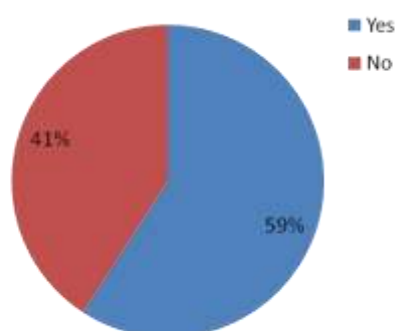


3.14 過去 5 年間に前日シンポに参加したことはありますか？

・ 20 歳代 ・ 30 歳代



・ 40 歳代 ・ 50 歳以上



(5) 自由記述欄

2.13 その他、改善点などがありましたらご記入下さい。

海岸工学論文集に関する事項

- 電子論文のページ数制限を増やす。(最大 10 ページ)
- 査読における本文体裁に関するばらつきがあり過ぎ。これに伴う労力が結構多かったりする。結局 PDF で掲載されるのだからもっと自動化して統一できないか。また、PDF 化してもフォントが埋め込まれていなければ機種により期待通りのものになっていないのではないかという不安。
- 最近、掲載される論文数が多いので、もう少し掲載される論文数を減らして、その分質を高めたほうがよいと思います。
- 水工学論文集や海洋開発論文集のように、CD-ROM も添付してほしい。
- web 上の情報よりも紙媒体の情報の方が読みやすいので、ついつい読まずに過ごしてしまいます。討議集も、完全 web 化されてから、あまり目を通すことがなくなってしまいました。自分自身で反省すべきことかもしれませんが、なるべく紙媒体（冊子）での情報発信を残す方向で、ご検討いただければ幸いです。
- ページ数については 5 ページ程度にしておくと、書きやすさから投稿しやすいと思います。一方、Online に一本化された後であれば、5 ページを標準とし、1 ページ増えるごとにページチャージを取ることで、認めてよいと思います。査読のことを考えると、最大 8 ページあたりでしょうか。
- 論文内容によっては、事例紹介のようなものまで採択されている。このようなものは、事例が多数集まった段階で何がいえるかを整理して発表すべきと考える。第一著者だけでなく著者になる論文数の制限なども必要ではないでしょうか。

- 海岸工学論文集を海洋開発論文集のように CD をつけて欲しい
- 英文要旨は有効に機能しているのでしょうか？短文といえどもネイティブに確認してもらうなどの手間がかかるので、本当に必要か否か再検討していただけるとありがたいです。
- 集計ご苦労様です。査読の形態など、課題は多いかと思いますが特別号と一般号の区分をせず、年間に投稿された土木学会論文集(B2)の著者のうちの希望者が発表する機会を海岸工学講演会とすると良いかと思います。（そして 5 ページの制限は排除する）
- 国際性（アジア圏の共同、地球環境） 地域性（行政支援、地域の環境・防災・開発） 先端性（大学教育、先進国との競争的研究）学際性（他分野との連携。気象、海洋、河川、水文） 特異性（海岸工学ならではのテーマ） 以上のバランスが保てるような論文集+講演会が目標では？
- マニアックな論文のままで、十分息が長く続くと思います。ただ今後は、海洋開発よりも応用力学との差異がなくなってくるのではないのでしょうか？（個人的な感想です）

査読方法に関する事項

- 査読を自分の意見を言う場と勘違いしている査読者がいる。「学会で議論すべきこと」と「査読」との違いを査読委員に周知させてほしい
- 査読者の人選をどのような規定 or 規準に基づいて実施されているのか公開した方がよいと思われます。小職は、水工学委員会から 3 人目の査読者（委員会幹事 or 委員以外の一般査読者）としての査読依頼がしばしばあります。一方、ここ 10 年以上、海岸工学論文集に投稿し、受理されて論文が掲載されているにもかかわらず、アブストラクトの査読さえも依頼がありません。どのような規準で査読者を選定されているのか知りたいものです。ガラス張りの方が良いと思われます。
- 現在の査読方法は、journal としては問題がある。質の悪い論文も 1 次査読を通過しているし、将来発展するかもしれない研究を取りこぼす危険性もある。講演・conference paper と論文集を切り離し、講演は基本的にひとり 1 編なら受け付ける（簡単な査読があっても良い）。論文集は conference paper を投稿することを奨励するものの、あくまでもフル査読とした方がよい。
- 複数の現査読委員から、担当する論文数が多くて、ちょっと専門から外れると、十分に査読できないと言う感想をよく聞きます。大学の准教授以上や複数の論文を発表している一般研究機関の研究者ならば、専門に関して十分な査読能力があります。彼らをリストアップして、拒絶者を排除したのち、それをデータベースとして保存し、一人当たり 5 編程度に担当数を減らしたら如何ですか？また、類似の他論文集の査読委員を担当しているので感じているのですが、アブストラクトだけで正しく排除できているケースは、誰が読んでも酷いと思える場合だけだと思います。一人当たりの担当数が半減するならば、最初からフルペーパーを査読することが可能になります。

- 査読意見が正しくない場合が少なからずあります。審査委員のモラルの一部低下が見られます。改善を計らなければいけないと思います。
- 第1次査読でコメントを返すべきではないでしょうか。点をつけるだけでは査読とは言えないと思います。掲載論文の質を保つために、採択率をある程度抑える必要もあると思います。
- かつての海岸工学論文集は、採択が狭き門であったため、短い5ページでも濃厚な論文が多かったと感じていた。そのため、他分野の研究者・技術者からも論文として一目置かれていた。しかし、現在は採択率が年々多くなり、変化を感じる。フルペーパー査読はスケジュール的に厳しいので、論文・報告の区分を作り論文の採択率を厳しくしたほうが、論文として価値が維持できるのではないのでしょうか。
- 現在の海岸工学論文集は、海岸工学講演会の発表数を基準に採択数が決められている印象を持っています。アブストラクト査読で全体の論文数がほとんど決まり、二次査読の段階で論文全体の質が明らかになっても、その段階では落とせないようなシステムになっているのではないのでしょうか。幅広い分野を網羅することは大切かと思いますが、同時に質を担保する方法を考えていただきたいと思います。
- 基本的には、査読者を増やし、フルペーパー査読にし、丁寧な査読をおこなう。どうしようも無い論文以外は、査読段階で論文を改善してあげる。
- 頁数を10p、最初からフルペーパー査読、発表無しで論文のみならば、論文集へ投稿すればよいのでは。
- アブスト審査のままとしても査読者はコメントを書き、著者に知らせるべき。著者には有益な情報。
- 査読者の数（他学会の専門家も含めて）2-3倍に増やすべき。一人、十数編の（きちんとした）2次査読は不可能。
- 査読結果は評点だけでなく、理由も知りたい（コメント等の公開等）。
- アブスト投稿後、本論文を提出しない場合、現状はペナルティありと理解しています。一方で、誤り、あるいは不適切な点に気づき、抜本的な修正の困難なこともあると思います。論文集のレベル維持のためにも、むしろ不安のある論文は取り下げてもらう方がよいと個人的には考えますが、講演会と絡むので、講演数の適切な管理など、難しいことがあるのも分かります。少なくとも、募集要項では途中で取り下げるとは原則認められないといったことを周知しておく必要があると思います。
- 1次はアブストラクト査読で結構ですが、その際に査読者の意見をもらえるようにしてほしいです。1次での通過枠を広げて、2次のフルペーパー査読で採択枠を絞るのがいいと思います。（今は1次査読が通過すれば採択される、という風になっていると思います。）
- 本論文査読については、割り当て論文数が他の論文集と比較しても突出して多いと思います。負担が大きいということもありますが、他分野から、いい加減であるとの印

象を持たれている場合もあります。査読者を増やすか、国際ジャーナル論文でも査読はせいぜい3名ですから、海工は主査+副査1名にするなど、査読体制は変えた方がよいと思います。

- まず、全体として査読のレベルが統一されていないように思います。その結果論文の質が低下しているようにも思えます。海岸工学は、学術に軸足を置いて成長してきた委員会であり、その学術の部分が揺らぐようなことがあってはならないと思います。また、学問として成熟期を迎えて、一つ一つの研究が小さくまとまったものとなり、言葉は悪いですが重箱の隅をつつくような研究が増えているのではないのでしょうか。研究の大きさとか広がりとか、これを感じさせるような論文が少なくなってきたように思います。これを打開するには新しいブレイクスルーのような研究テーマが必要なのではないのでしょうか。それも、海洋などの周辺に手を広げるのではなく、海岸というベースの部分に根ざす必要があると思います。足元をしっかりと固めるブレイクスルーのような研究テーマを見つけることは容易なことではないと思いますが、伝統的な波の研究、漂砂の研究、波と構造物などにイノベーションが起きそうな時期に来ているのではないのでしょうか。
- 土論でありながら、他の土論と査読方法が異なるのは論文集としての基本事項を満足していない。

論文投稿や時期に関する事項

- 論文を全てWEB申し込みできるようにしていただきたい。
- 年度末は繁忙期であるため、論文投稿は4月以降としていただけるとありがたいです。
- 海洋開発と投稿時期が近すぎる。
- 本論文の査読結果が出てから、修正論文を投稿するまでの期間が、査読内容と比較して短すぎる（対応不可能な要求の場合がある）場合があると思います。ぎりぎりのタイムスケジュールであることも分かりますが、あと1週間はあった方がよいと感じます。
- 発表無しである以外は同じシステムで論文だけ投稿することを認めると投稿数は増えるかもしれません。特に、発表にはあまりふさわしくない細かい議論ではあるが、役に立つ情報もあると思いますし、本論文で口頭発表するという文化にはなじめない人たちからの投稿や、出張やあてにならない卒業生の不安をかかえ、発表できなかった場合の不安を抱えている場合にも投稿しやすくなります。投稿時点で、口頭発表、ポスター発表、発表無し、を選べるとよいと思います。
- 第1段投稿時期を4月末締切にしていただけると、民間企業からの投稿が増えるように思います。3月はどの業種においても業務が集中しますので、締切が4月末であれば、執筆時間を確保しやすいからです。
- アブストラクト受付時期は1ヶ月延ばして4月にできましたらお願いします。投稿・

査読など電子対応化が進んでいますので、少し遅らしても講演会11月開催は対応可能ではないでしょうか。

討議集に関する事項

- 土論になって、討議集の位置付けが曖昧になっているのではないのでしょうか。討議は、本来なら、土論にディスカッション論文として掲載すべきでしょう。が、質問者の負担や講演会での質問の質（初歩的な質問）など解決すべき問題が多々ありますので、すぐには解決できない問題であると認識しています。
- 討議集については、10年ほど前の冊子になっていた頃はたまに目を通したが、現在の形態になってからはほとんど見たことがありません。
- 討議集はなくしてよいと思います。担当者の負担が非常に大きいです。一方、ジャーナルなので、討議や著者からの補足を公式にJStage上で掲載できるようにすればよいと思います。
- 討議集と論文の一体性がないため、討議集を目にすることが少ない。討議集と論文を1枚のCDにする、委員会のWEBで公開されている論文に討議集のリンクを貼るなどした方がよいと思います。

3.17 3.16 で「応募する」と回答された方に質問です。 自主企画セッションのテーマをお教え下さい。

- 温暖化による沿岸域への影響
- 海岸・港湾施設の維持管理
- 海岸構造物の維持管理とアセットマネジメント
- 具体的な企画は現在ないが、フリーな場があっても良いと思う
- より効果的な海岸侵食対策工法の提案
- 流域・海域システム
- 防災・環境シミュレーター
- 国際協力：沿岸域 SD (Sustainable Development)
- 沿岸外力の極大値、海洋構造物や海浜地形への甚大な応答値に関する観測および解析手法

3.18 その他、改善点や投稿数を増やすアイデアがありましたらご記入下さい。

海岸工学論文集に関する事項

- 掲載論文数を2割ぐらい減らし、1本の論文のページ数を増やす。フルペーパー査読にし、

査読時間を十分に確保する。要は質を向上させ、インパクトファクターや **Science citation index** に対応する。論文が通りにくくなるが挑戦をかきたてるものとする。投稿数は減るかもしれないが、長期的には有効なのではないかと思う。

- 著者の負担金額をもう少し下げてくださいのほうが、より投稿し易いです。
- 民間からの投稿機会を増やすために、論文だけでなく、特徴的な工事や災害などの報告も受け入れてはいかがでしょうか。以前は論文と報告文と 2 種類あったように記憶しています。
- 海岸事業の現場が直面している問題に関する現場技術者の発表が増えると、現場のニーズと研究者のシーズが繋がるのではないかと。現場技術者の参考になる発表が少ないため、現場技術者の中では投稿や聴講の意欲が低いようである。
- 海講論文の元となる 20 頁あるいはそれ以上の技術論文を自分のホームページに掲載するように指導していただきたい。5 頁の論文だけでは、他の研究者・技術者が論文内容を発展させて利用することがむずかしく、発表者が論文を発表するという自己満足に陥ってしまう。
- 原稿の募集を、「将来的に成果を見込めるが現在はまだ発展途上の研究」と「まとまった成果を発表する」ものとは分けるのはいかがでしょうか。講演概要集的なものは論文のページ数を少なくし、その代わり議論する時間を長くする。まとまった成果に対してはページ数を増やす代わりに議論の時間を減らす。現在の海岸工学講演会や海岸工学論文集は、どちらにも対応しておらず、いずれの場合も中途半端な印象を持っております。質を担保する一方で、投稿しやすい環境を提供するという案です。
- 投稿数はこれ以上増やさなくてもよいのでは。
- テーマが大学の細かいテーマや、環境に偏りすぎている。もう少し、設計・施工への投稿促進をして企業・実務者の参加を促して欲しい。
- ・主催者大学の概要・研究紹介（開会式で 5 分程度）、協賛会社（アレックなどのメーカー）の商品プレゼン（1 - 2 分/社）、キーノートスピーチ（どの学会からでもよい）、他分野からの座長セッション（1 - 2 個程度）、英語セッション、日本語セッションで分けるのではなく、内容で分けるべき。・現状のままであれば海講の英語名は **proceedings** が適当。そうすれば **CEJ** との棲み分けも可能で、英語セッションだけ **proceedings** にするという不自然さもなくなる。（海岸工学の論文：journal は **CEJ** 一本にすべき。）
- 海講は、論文なのか、学会なのかスタンスが曖昧すぎる。論文であるなら発表は不要、学会であるなら要旨だけでいいのではないかと。土木学会論文集との関係も含めて、立場を明確にした方が良くと思う。
- 増やしたいのであれば、フルペーパー査読の本論文とポスターセッション、年次講演会的な簡易な論文を並存させる。そもそもある程度以上のグレードを維持しようと思えば、採択する以前に投稿数もそれほど増えないのではないかと。量的な繁栄を目指す

のか質的（少数精鋭）なところを目指すのか、議論が必要ではないか。

- 厳選された論文集を希望します。
- そろそろ著者投稿pdfをほぼそのまま使用してもよいのでは？（著者作成のpdfよりも、印刷業者が改めて作成するpdfの方がクオリティが低い場合も多いのでは？）

海岸工学講演会に関する事項

- 投稿論文内容に適したセッションにおける発表をする。
- ポスターセッションを設定する。（発表時間5分）
- 投稿数を増やすには、1)発表可能数を増やす、2)講演会の開催地を行きたいと思う場所にする、3)掲載料を下げるなどでしょうか。月並みな意見だと思いますが…。
- ポスターセッションが有っても良いのではないかと思います。
- 海洋開発論文集と合わせて一本化し、年2回開催の海岸工学講演会とする。
- 開催地ならではの見学会や前日シンポを積極的に行い、その地域の問題点や他地域への展開について議論する。学生や民間企業へ研究意識の高揚を図る。
- ポスターセッションを実施してはどうでしょうか。限られた発表時間の質疑より内容が充実します。また、論文数を増やすことにもつながらないでしょうか。投稿数を増やすことより、内容の充実に注力すべきではないでしょうか。
- 分野を散らばらせずに、たとえば1日参加すれば同じような分野はすべて聞けるようなプログラムにしてもらいたい。
- 会場間を移動することが多いので、会場同士をできるだけ近くしてほしいです。開催地に普段あまり行かないような場所を選定する。見学会は行きたいですが、前日から現地入りするのは厳しいので参加できません。期間中開催で発表や注目論文とかぶっていなければ参加したいです。ポスターセッションや発表無し論文では論文の質が低下しないか危惧します。
- 先にも書きましたが、発表無し、ポスター発表など多用な形態を認め、5頁を標準としつつも若干のページ制限の緩和をするとよいと思います。本論文査読については著者側としても査読者側としても対応の困難な状況が生まれますので、印象が悪いです。改善が必要と思います。
- 最終日の最後のセッションなどは特にそうですが、参加者が少なくなってしまう、活発な討議ができていません。思い切って発表編数を減らしてでも、最終日は早く終わるような配慮が必要ではないかと感じています。
- 3.16「応募しない」が公聴は是非したい。海洋開発の特別セッションは毎回満足している。
- 海洋開発シンポジウムと海岸工学講演会のスミ分けが必要だと思います。民間会社にとって、双方に論文を投稿するのは、論文作成に要する労力や旅費などの負担が大きいです。最近の厳しい情勢の中では、自腹での参加を求められる事も多いので、民

間会社の人間が参加するのは、非常に困難になっています。例えば、海洋開発シンポは構造物系で海岸工学講演会は環境系などの分けがあれば、参加しやすくなるのではないかとと思います。

- 投稿数を増やすためには、上記にもあった論文無しで発表だけ（ポスターセッション？）も有りにしては？ 要旨査読オチだけでなく、はじめからポスターセッションを希望する（学部卒業生による）学生発表等もあり？しかし、労あって、報い無しかもしれない（結局、現状のままが良いのか？）

査読方法に関する事項

- 個人的には採択率を 40%以下に絞り、論文を厳選してページ数を増やして欲しい。
- クオリティの維持・向上に努めて、本講演会の魅力を維持して集客力を強化することが大事かと思っています。専門分野が適切な査読者を（必要であれば他分野からも）お願いしたり、採択数を一時的に下げること必要かと思っています。

論文投稿方法や投稿時期に関する事項

- 例えば、役所やコンサルタントからの投稿を増やすために、アブストラクトの締め切りを4月以降にするとともに、アブストラクトでの査読を甘くして、厳しい査読意見を付けた上で、本論文を投稿してもらう。

その他

- 外部資金を獲得して、若手教員の雇用機会を増やせば、（学生も増えるので）投稿数も増える。資金獲得の努力は継続する必要あり。
- 海岸工学の衰退傾向は避けられない。論文集では、採択論文数を減らし、質を確保することに重点を置くべきでは。
 - ・ 韓国、中国、台湾等近隣関係諸国からの（招待）論文を（英文セッション）に入れる。
 - ・ 海洋気象学会との連携を検討。連続開催、連携開催等。
 - ・ 海洋開発論文集との遊離も問題あり。現地、企業と連携を海岸工学においても今後重視すべき。
- 投稿数が増えるのが善という呪縛から逃れる理屈を考えてはどうでしょうか。
- 海岸工学は学術に立脚しているといっても、学や官だけの学会ではなく産が重要だと思います。どうも今の体制は学偏重となっていて大学のための学会となっているように思えます。海岸工学は、これまで産官学がうまくバランスして発展してきたように思います。大学も土木の看板を下ろし土木を担う学生数が減り、産も公共事業の削減で厳しい環境、官もまたしかりという状況の中、社会の縮図のように海岸工学分野も縮小均衡になっているように思えます。このためには、受け皿としての産が元気にならなければなりません。そのためにはビックプロジェクトを推進することが必要で、

それに必要な学問の発展という相乗効果がでてくるのではないのでしょうか。一度は瀕死となった造船分野が息を吹き返していますが、産官学一体となった取り組みが行われているように思えます。そのような意識が海岸工学には欠けているのではないのでしょうか。論文投稿数という近視眼的なところをだけを見るのではなく、もっと大局を見ていかなければならなのではと感じます。